

武士の世の中へ — 鎌倉・室町時代 —

平安時代の後半から室町時代の関東は、桓武(かんむ)天皇を祖とする秩父氏や千葉氏に代表される坂東八平氏(ばんどうはちへいし)や都の貴族を祖とする比企氏や足立氏、あるいは武蔵七党(むさしちとう)と呼ばれる武士たちによって支配されていました。彼らは、未開墾地を開発して開発地名を名乗り、蓮田市およびその周辺では、武蔵七党(むさしちとう)野与(のよ)党の鬼久保(おにくぼ)氏、渋江(しぶえ)氏がいました。彼らは源頼朝の鎌倉幕府創立に貢献し、鎌倉幕府滅亡後の南北朝・室町時代の争乱でも活躍しました。周

辺では鎌倉との往来に利用した鎌倉街道(かまくらかいどう)ははっきりしていませんが、市内からは死後の極楽往生(ごくらくおうじょう)を願う当時の武士・民衆の信仰の一端を窺(うかが)わせる板碑(いたび:石造りの卒塔婆(そとうば))は関東地方に多いが出土しています。特に「寅子石」と呼ばれる「延慶4年(1311)銘(めい)板碑(いたび)」(大字馬込字辻谷)は、高さ4mの埼玉県下で2番目に大きいものです。また、江ヶ崎城跡は鎌倉時代後半の館跡として唯一残っており、県指定旧跡となっています。

鎌倉幕府と武蔵、蓮田 — 中世武蔵の社会・生活と蓮田 —

治承4年(1180)伊豆で挙兵した源頼朝(みなもとのよりとも)は、武蔵武士をはじめとする東国の武士たちに支えられ、文治元年(1185)の壇ノ浦合戦で平氏を滅ぼしました。また、守護・地頭を設置し、実質的に最初の武家政権を樹立し、建久3年(1192)には武士として初めて征夷大將軍に任ぜられました。頼朝に従った武士は御家人(ごけにん)と呼ばれ、本拠地を領地として安堵されました。また、各地へ守護・地頭として赴任し、武蔵武士の領地は全国へと拡大しました。

武蔵を基盤に成長・発展した武士は3つに分類できます。一つは畠山(はたけやま)氏や河越(かわごえ)氏などの秩父氏一族。もう一つは武蔵七党と総称される児玉党小代(しょうだい)氏や横山党大串(おおくし)氏などの中小規模の武士たち。三つ目は足立(あだち)氏や熊谷(くまがい)氏など出自は不明ですが活躍した武士たちです。彼らは、源頼朝の乳母は比企尼、義経の妻は河越重頼の娘というように、複雑な姻戚関係を形成しながら鎌倉幕府を支えました。

幕府は各地の御家人を支配するために「鎌倉街道(かまくらかいどう)」という道を整備しました。幕府が滅亡した後も、鎌倉府が鎌倉に置かれたので街道はそのまま使われました。戦国時代には政治の中心は鎌倉から小田原へ移りますが、鎌倉街道は引き続き小田原へ通じる重要な街道となりました。渡船や架橋の設置も進み、宿場や市場も開設されるようになりました。

埼玉県内には、鎌倉街道(上道・中道)が並列して南北に走っています。この街道は政治的・軍事的目的だけではなく、経済や文化伝播の上でも重要な役割を担いました。その証として、県内の中世遺跡からは遠くから運ばれた焼き物(常滑(とこなめ)焼、瀬戸焼)や銭などが出土しています。なお、蓮田市内からは中世の遺跡が23ヶ所確認されています。



「図解日本史」より

源頼朝の挙兵時には、敵対した畠山重忠ですが、その後は功績をあげ、重き位置に置かれるようになります。蓮田市の周辺には、武蔵七党野与党の鬼久保氏、渋江氏がいました。彼らは源頼朝の鎌倉幕府創立に貢献し、幕府滅亡後も南北朝・室町時代の争乱でも活躍していました。市内には、文献に残された武士は明確ではありませんが、これらの氏族に関するものが、かかわっていたことが推測されます。



中世館跡の溝
(宿下遺跡)

宝篋印塔
市指定文化財



寅子石
県指定文化財



蓮田市内の鎌倉～戦国時代遺跡分布図

中世の信仰 — 鎌倉時代以降の人々の信仰 —



寅子石 県指定

市内からは死後の極楽往生(ごくらくおうじょう)を願う当時の武士・民衆の信仰の一端を窺(うかが)わせる板碑(いたび)が現在までに174点確認・出土しています。板碑(いたび)は、主に供養塔として使われる石碑の一種で、「板石卒塔婆(いたいしそとうば)、板石塔婆(いたいしとうば)」とも呼ばれます。寅子石に代表される武蔵型板碑は、秩父産の緑泥片岩を加工して造られるため、「青石塔婆(あおいしとうば)」とも呼ばれます。この時期、仏教が当時の武士たちに鎌倉仏教として広く信仰され、武蔵武士の本拠地であった埼玉県内には現在、約2万基にのぼる板石塔婆があり、質・量ともに全国一の規模を誇っています。基本構造は、板状に加工した石材に梵字=種子(しゅじ)や被供養者名、供養年月日、供養内容を刻んだもので、頭部に二条線が刻まれますが、実際には省略されるものもあるようです。また、末期の小さい板碑に法名と没年月日を刻んだ簡単なものは、中級階層の庶民たちの墓塔と思われま

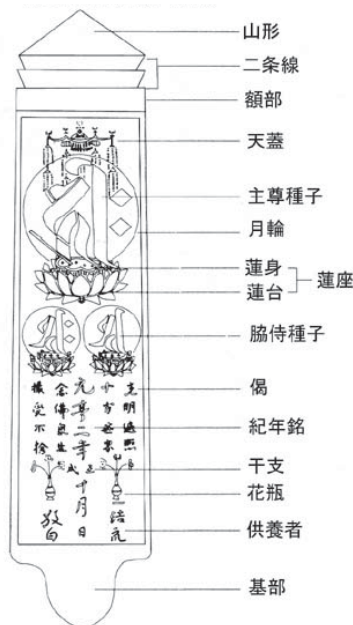
す。分布地域は、関東を中心に日本全国に分布していますが、鎌倉武士の本拠地とその所領に限られ、鎌倉武士の信仰に強く関連すると考えられています。造立時期は、鎌倉時代～室町時代前期に集中しています。現在知られる板碑では、埼玉県熊谷市(旧江南町)須賀広発見の嘉禄3年(1227)のものが最も古く、埼玉

県内に古い板碑が集中している傾向が認められます。市内で最も古いものは、弘安8年(1285)銘で、新しいものは永禄元年(1558)ですが、全国的な傾向と同様で14～15世紀が中心のようです。

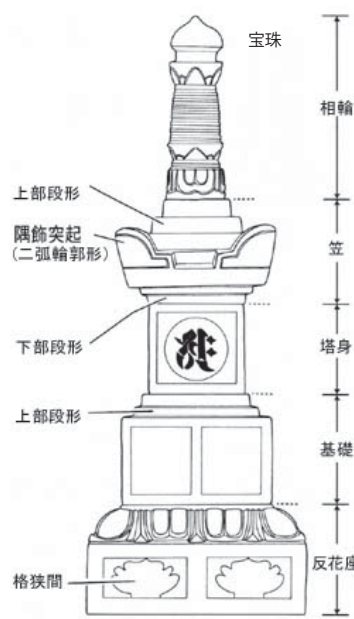
市内では、特に「寅子石(とらこいし)」と呼ばれる延慶4年(1311)銘板碑が大字馬込字辻谷に所在し、高さ4mの埼玉県下で2番目に大きい板碑です。唯願法師が真仏法師(親鸞の直弟子)の報恩供養のために建てられたものです。この他に延元元年(1336)の南朝銘の年号が刻まれた板碑も存在し、市内にも南北朝の争乱の影響があった可能性も想定されます。板碑は文字資料が数少ない蓮田の中世の状況を窺い知ることのできる資料の一つです。

宝篋印塔(ほうきょういんとう)は、墓塔・供養塔などに使われる仏塔の一種で、五輪塔(ごりんとう)と共に多く造られる石造物の一つです。

宝篋印塔の最上部の棒状の部分は相輪(そうりん)と呼ばれる部位で頂上に宝珠を乗せ、その下に請花(うけばな)、九輪(宝輪)、伏鉢などと呼ばれる部分があります。相輪は宝篋印塔以外にも、宝塔、多宝塔、層塔などにも見られるもので、単なる飾りではなく、釈迦の遺骨を祀る「ストゥーパ」の原型を残した部分です。相輪の下には笠があり、この笠の四隅には隅飾(すみかさざり)と呼ばれる突起が造られます。笠の下の方角の部分は、塔身(とうしん)、さらに下の方角部分は基礎(きそ)と呼ばれる部位で構成されます。この塔身部に四角の輪郭を刻んで基礎部に格狭間(こうざま)が二つあるものは、「関東形式」と呼ばれ、四角の輪郭が刻まれずに基礎部の格狭間が一つの型が



板石塔婆の部分名称
「遺史園」より



宝篋印塔の部分名称
「遺史園」より

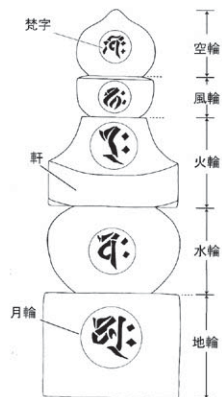
「関西形式」と呼ばれる基本型です。名称のとおり、関西形式は関西地方に、関東形式は関東地方に分布しています。ただし、時代・地方により多少の違いが見られます。例えば、頂上部の宝珠は、時代が下るとともに、膨らみが失われ、室町期・江戸期を通して先端が尖っていくという特徴があります(この特徴は、宝珠全体のもので、五輪塔・宝塔・石灯籠・擬宝珠(ぎぼし)でも同様です)。また、隅飾も時代が下るごとに、外側へ張り出す傾向があり、江戸期には極端に反り返る隅飾へと変化しました。基壇も次第に反花座などの飾りをもたない方形石の基壇へと変化しました。この他にも、塔身・基礎部の大きさの違いをはじめ、塔身に種子、仏像のレリーフを刻むものや、二重輪郭をとるものなど、塔によって様々な形態があります。

五輪塔(ごりんとう)も主に供養塔・墓塔として使われる仏塔の一種で、「五輪卒塔婆(そとうば)、五輪解脱(げだつ)」とも呼ばれます。五輪塔の形はインドが発祥といわれ、本来舍利(お骨)を入れる容器として使われていたといわれていますが、日本では平安末期から供養塔、供養墓として使われるようになりました。石材は安山岩(あんざんがん)や花崗岩(かこうがん)が多く使われ、小さいものでは凝灰岩(ぎょうかいがん)も多く使われます。他に木製、金属製、鉱物製(水晶)などの塔もあります。五輪塔は下から方形(地輪:ちりん)・円形(水輪:すいりん)・三角形又は傘形・屋根形(火輪:かりん)・半月形(風輪:ふうりん)・宝珠形(空輪:くうりん)を積み上げた形に作られます。五輪塔も製作された時代・時期、用途によって形態が変化します。特に、石造のものは変化に富んでおり、例えば一つの石から彫りだされた小柄な一石五輪塔(いっせきごりんとう)、火輪の形が三角錐(さんかくすい)の三角五輪塔、地輪(四角)の部分が長い長足五輪塔(ちょうそくごりんとう)と呼ばれるものなどの様々な形のものがあります。また、板碑(いたび)や舟形光背(ふながたこうはい)に彫られたものや、磨崖仏(まがいぶつ)として彫られたものもあり、浮き彫りや線刻(清水磨崖仏などに見られる)などで表現されています。

特殊な例としては、一般的に塔婆(とうば)や卒塔婆(そとうば)と呼ばれる木製の板塔婆や角柱の卒塔婆も五輪塔の形態を持ちますが、五輪塔とは言わず単に塔婆や卒塔婆といひます。卒塔婆(そとうば)もインドにおける仏舍利(ぶっしゃり)を収めたストゥーパの中国における漢字による当て字で、日本では略して塔婆や塔ともいわれます。

また、鎌倉時代末の正和3年(1314)銘の刻まれた「鰐口(わにぐち:個人所蔵)」が江ヶ崎の久伊豆神社周辺から出土しています。この鰐口(神社の鐘)には「寄進者行蓮(ぎょうれん)」の銘が刻まれています。周辺には江ヶ崎城も存在し、鰐口とほぼ同時期の館跡でもあり、関連性も推測されます。

市内では非常に数の少ない中世の文字資料であり、鰐口としても県内で最も古い鎌倉時代の貴重な資料です。



五輪塔の名称
「遺史園」より



正和3年(1314)銘鰐口(個人蔵)